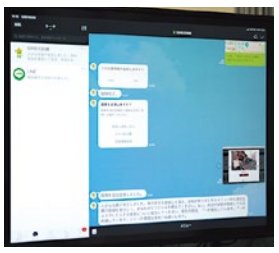
全国初 LINEを使った災害情報収集システム
実証実験を実施

神戸市は、12月21日にLINE上でAIを使った災害情報収集の実証実験を行った。被災状況の写真や文章を送信すると、スマホの位置情報を元にネット上の地図に一覧表示される仕組みで、被害の大きさや状況が一目でわかる。人間との会話や文章のやりとりが可能なAIプログラム「チャットボット」を活用したもので、同種の実験は全国初。

チャットボットを事前にLINEの「友だち」登録しておくと、災害時にボットが市民に話しかけ、タイムリーな被災情報を収集する。虚偽と思われる情報には、信憑性を現地の被災者に確認し、デマの蔓延を防ぐ。支援物資の過不足や配布場所など、被災後の生活支援にも役立てる。

実験には、市職員約150人が市民役で参加した。阪神・淡路大震災を経験していない若手職員の研修も兼ね、当時の被害写真を使って現地から情報を送信した。参加者は「普段使っているアプリなので、操作に困ることはなかった。ボットからの問いかけもあるので迷わない」と使い勝手を評価した。


実証実験の様子。LINE上に被害状況の写真を送ることもできる。

同市危機管理室では、集まった情報が地図に表示される様子を確認。フィルタリングの精度や利便性について議論した。鍵本敦室長は、現地の状況がわからず混乱した24年前の震災を引き合いに、「地図に被害が可視化されるので非常にわかりやすい。こうした仕組みを使って一人でも多くの被災者を救いたい」と話した。

今回の実験は、防災・減災の強化を目指す、内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)プロジェクトの一環。神戸市が災害時のIT活用に向けて受け入れている民間人材2名との連携で実現した。神戸市は今後、実験結果をフィードバックし、システム実用化に協力していく方針だ。

甲陽学院高の生徒
地学&化学で金銀メダル

(上)2年生の大野智洋さん。受賞後は、地学オリンピック出場者のOB会に所属して活動に参加し、交流を深めている。(左)3年生の西口大智さん。気づけば15時間、化学の勉強に没頭していたこともあるという。

地学と化学の国際オリンピックにおいて、昨夏、甲陽学院高等学校(西宮市)からそれぞれ1名ずつメダリストが誕生した。タイで開催された第12回国際地学オリンピックで見事に金メダルを獲得したのは、2年生の大野智洋さん(17才)。38カ国・地域、139人が参加し、筆記・実技試験などを経て選考された。一方、第50回国際化学オリンピックでは、3年生の西口大智さん(18才)が銀メダルを受賞。76カ国・地域から300名が参加し、スロバキアとチェコの2カ国で約10日間に渡り開催された。

二人とも小学生の頃からそれぞれの分野に興味を持ち始め、大野さんは「勉強をしてきたというより、好きなことに夢中になっただけ」と話す。また、オリンピックに出場したことで、「同じ興味を持つ友人と出会い、世界レベルのコミュニティができて良かった」という。西口さんは、「自然界がすべて原子でできているという事実に衝撃を受け、化学に興味を持ちました。分子の構造など、化学は美しいと感じます」と受験勉強の息抜きにも化学の本を読むほど。母の美絵さんによると、「特別な英才教育などはしていません。昆虫図鑑や恐竜など、小さい頃から興味のあるものに集中して取り組む性格でした」と述懐する。

ともに「将来は研究者などとしてその道に携われたら」と語った。

なお二人とも、各オリンピックでの功績が認められ、スポーツや文化等で優秀な成績を上げた兵庫県下の私立学校生らに贈られるマロニエ賞も昨年12月に受賞した。

新たに消防訓練施設が誕生

7階建て建物での訓練の様子。

西宮市消防局は11月27日、消防訓練施設を甲子園浜に新設し、運用を開始した。7階建てマンションや一戸建てを模した建物で消火・救助訓練ができるほか、がれき現場や山岳救助に対応した施設等も備える。同局では、年々多様になる災害現場への対応能力向上のため、複数の部隊が連携した総合的な消防訓練が行える施設として、整備を進めていた。同施設は市民も利用可能で、水蒸気による濃煙体験や避難ハッチの使い方など、実際の火災に近い環境で防災訓練ができる。同局の担当者は、「実践に即した訓練を実施し、今後の災害対応に活かしていきたい」と話した。

僧侶が同行する日帰りバスツアー

神戸市内の13寺からなる「神戸十三仏霊場会」は、僧侶が同行する日帰りバスツアーを1月から始めた。寺の年中行事の時期に合わせて年5回予定し、毎回2〜3寺を訪問、1年で「十三仏霊場巡り」ができる。ツアーでは僧侶がガイド役としてバスに同乗。車内で仏教を解説するほか、各寺では住職の法話も聞ける。設立25年の同会が、地元の文化や歴史的建築を知ってもらいたいと企画した。共催する神戸新聞旅行社の担当者は、「ツアーでは、一般公開されていない秘仏のご開帳があるところも。お坊さんと一緒に回ることで、仏教を身近に感じてもらえれば」と話した。

1月の後は3月に開催予定。料金は昼食付きで1回8,580円〜9480円。問い合わせ先:078-362-7174(神戸新聞旅行社)

ヨドコウ迎賓館 2年3カ月ぶりにリニューアルオープン

芦屋市にある国指定の重要文化財「ヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅)」が保存修理工事を終え、2月16日に一般公開を再開する。老朽箇所の修理のほか、手すりの設置などで建物を活用しやすくした。同建物は、旧帝国ホテルの設計で有名な建築家フランク・ロイド・ライトが手がけた住宅建築で、1924(大正13)年に灘の酒造家、山邑家別邸として竣工。昭和になり株式会社淀川製鋼所の所有となったのち、1974(昭和49)年に重要文化財の指定を受けた。リニューアルオープンに合わせ、2月16日〜5月6日まで保存修理工事パネル展を開催する(ただし、3月1日〜4月7日は雛人形展を開催)。

工事を終えたヨドコウ迎賓館の外観。

認知症高齢者が起こした事故に市が保険金 最高2億円

神戸市は、認知症の高齢者が事故を起こした際、相手への賠償金や見舞金を支給する全国初の事故救済制度を4月から始める。市は必要財源を約3億円と見積もり、個人市民税均等割の上乗せでまかなう条例改正案が昨年12月に可決された。4月より納税者1人あたり年400円の増税となる。

制度は認知症と診断された人を対象に、最高2億円の保険金が支給される賠償責任保険料を市が負担するほか、認知症の人が起こした火災や傷害などの事故に遭った相手には、最高3千万円の見舞金を支給する。いずれも自動車事故は対象外。市は、認知症は多くの人がなり得る病気として、薄く広く負担を求めるとしている。

サイバーセキュリティ対策を強化しよう

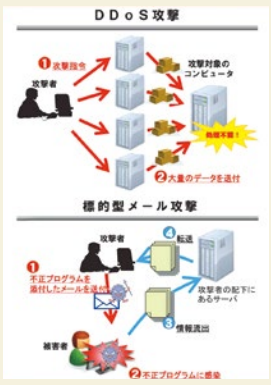
協力:兵庫県警察

今年は6月に「G20大阪サミット」、9月からは「ラグビーワールドカップ2019」が開催される。

こうした大規模なイベントは、サイバー攻撃の格好の標的となる可能性がある上、IoT(アイオーティ)機器を悪用した大規模なサイバー攻撃の発生も懸念される。

パソコンやIoT機器などにセキュリティ対策が適正に施されていない場合、重要な情報を盗まれるだけでなく、攻撃の踏み台にされるなど、サイバー攻撃に荷担してしまうおそれがある。

攻撃の被害に遭わない、攻撃に荷担しないためにも、サイバーセキュリティ対策をしっかり行うことが重要だ。



「サイバー攻撃とは」
重要インフラの基幹システムに対する電子的攻撃「サイバーテロ」や、情報通信技術を利用したスパイ活動「サイバーインテリジェンス」のこと。

【 サイバー攻撃の特徴 】
- ○ 攻撃の実行者の特定が難しい
- ○ 攻撃の被害が潜在化する傾向がある
- ○ 国境を越えて実行可能

【 サイバー攻撃の手口 】
攻撃対象のコンピュータに一斉に大量のデータを送信してサービス提供を不能にする「DDoS 攻撃」や、不正プログラムに感染させ、意図しない動作をさせるものがある。
不正プログラムに感染させる手口として標的型メール攻撃が国内でも多く発生している。

【 対策 】
- ○ パソコンの基本ソフトやウイルス対策ソフトなどを常に最新の状態にしておく。
- ○ 見覚えのないメールのリンクをクリックしたり、添付ファイルを安易に開いたりしない。
- ○ USBメモリを利用する際はこまめにウイルスチェックを実行する。
- ○ 類推されるおそれのある簡単なパスワードを設定しない。